

荒鷲

3

福岡大学書道部機関誌

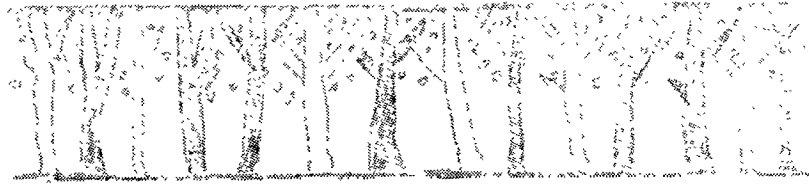
保存

巻頭言

文化ということば程便利なことばはあまりない。そしてまた文化ということば程わからないことばもないでしょう。だから昔から文化ということばは、いろいろなところに盛んに使われ、わかたようなわからぬ新日本語をたくさん作り出しているようであります。世界文化、西洋文化、東洋文化—文化国家、文化日本、文化人、国民文化、文化生活、文化的など……。

これらのことばの中から受ける「文化」ということばの印象は原始性に対する人間的進歩性、自然に対する人為的合理性、非科学性に対する科学性、非芸術性に対する芸術性などがあります。つまり「文化」とは要するに人間の生活そのものをすべての点にわたって高度なものにすること、即ちだんだん原始や自然から遠ざけ、動物と人間との距離を一層大きくする働きをいうのであるように思われます。

そこで生活にうるおいを与え、生活に豊かさをもたらす上に非常に大切な面、即ち文学、美術、書道などが生活の中にとり入れられることになる。そこに「書」というものが大事になってくる。



目次

巻頭言

新入生諸君に贈る 書頭部長 **古** 田 藤 夫 (1)

新幹事になつて 経済学部三年 渡 田 正 道 (1)

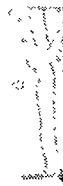
副幹事としての私の目標 商学部三年 齊 藤 光 生 (1)

就 職 三十九年卒 西 隆 義 (1)

入部してみて 養学部一年前 田 勇 子 (1)

入部してきて 商学部一年前 船 橋 隆 也 (1)

入部一ヶ月 養学部一年前 田 及 どの (1)



入部してみても

法学部一年生

入部一ヶ月 法学部一年 副田みどり (11)

自宅と下宿 法学部一年 井上勝登 (12)

新入部員と迎えて 四年 田崎義邦 (13)

新入生歓迎コンパについて 商学部二年 佐久間 潔 (14)

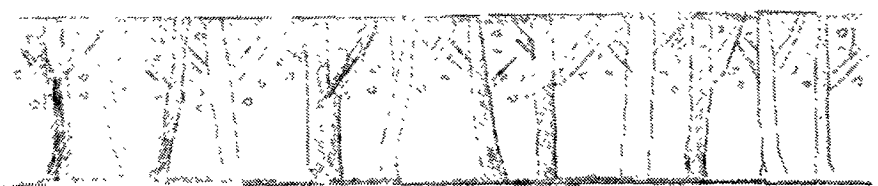
連盟展について 法学部二年 茂俊明 (15)

福岡学生ペン習字研究会 三年 龍 隆 彌 (16)

全国総合書芸展によせて 経済学部二年 三 輪 忠 伸 (17)

雅 歌 (一) 法学部二年 山 本 明 子 (18)

編集後記 (21)



新入生諸君に贈る

書道部部长 吉田龍夫

まず、このたび新たに書道部員とられた新入生諸君に対し心から観迎の意を表する。本学の書道部は、正式に部として認められてから未だ数年にしかならない。しかるに、今日のごとく大きな部にまで発展したことについては、つくづく先輩諸氏の純真な努力と若さのエネルギーの偉大さを痛感させられる。新入生諸君は、この先輩の努力の結晶を引きついで、大いに若いエネルギーを書道部のために発散させてもらいたいものである。

ところでフランスのフローベルは、「つたない表現は、われわれの胸を締めつけ、心臓の鼓動を妨げる。かくて、それは、われわれの生命の条件の外にある」といふことを言っておる。これが、もしわが国においてであつたならば、フローベルは次のようにも言うに違いないと思はれる。「悪筆はわれわれの胸を締めつけ、心臓の鼓動を

妨げる。かくて、それは、われわれの生命の条件の外にある」と。結局、悪筆は、われわれの生命の条件であるところの胸や心臓の鼓動を妨めつけたり妨げたりするものであつて、このようないつてのわれわれの生命の条件の外に置かれるといつて味のない言葉であらう。そして、この言葉は、反面に次のことを主張しようとしている。すなわち、「良筆は、われわれの胸をふくらまし、心臓を躍動せしめる。かくて、それは、われわれの生命の条件の内にある」と。われわれは、人の胸をふくらまし、心臓を躍動せしめ、人の生命の条件の内に入る事ができれば、人に高い価値を与えることができる。また、事を成すことができる。フランス人はフランス語を宝玉としている。フランス人はオシャベリの好きで国民である。そのオシャベリを聞いてみると、それは、用件を果すとか意志を交換するとかいふことよりも、たしかに、言葉の交換それ自体を楽しんでゐる。それは、お互に宝玉の言葉で、相手の胸をふくらまし心臓を躍動せしめ、相手の生命の条件のなかに入つて

いるのである。フランスは戦、ば必ず負けている。

「悪筆はわれわれの胸を締めつけ、心臓の鼓動を

を躍動せしめ、相手の生命の条件のなかに

いるのである。フランスは戦へば必ず負けている
しかし、それにもかかわらず、今日、世界にその
富強を誇り、世界の文化、外交の指導者を以て自
負しているのも、このフランス語の魔術があるか
らと考へられる。

わが国にも、古来、和歌は雨をも降らすといふ
言葉がある。が、それは、日本語としての和歌の
持つそのような言葉の魔術を言ったものであろう。
一昨年、私の渡仏中、パリで日本の古ぼけた
書軸が展示されていた。そして、二三字の草書体
の書軸の前に、若いパリっ子の群が立ち盡してい
たが、私は思はずフローベルの言葉を思い出して
ニマリとした。どうもいさか説教めくが、新入
生諸君も、先輩の後を継いで、書道に専んで、
いに人々の胸をふくらまし心臓を鼓動させて、人
々の生命の条件の内に入つてもらいたいものであ
る。

新 幹 事 に な っ て

経済学部三年 渡辺正道

部が誕生して六年目である我部は、現在他大等
に見られない構成と特殊性をもち、戦後の日本が
経験しているところの経済成長の急速な発展ほど
ではないが、急速な発展をこぼして来た。そして、
今年は例年になく新入部員が多く現社約部員総数
九十名という大世帯で発した。それ胡媽しいので
あるが、それにともなつて過大になつたクラブの
統制という問題が起る。故に、幹事として部
員一同にあえて要望したい。それは、当然である
かもしれない。また当然であるからに要望する
のであるが、団体生活における規律を守ることであ
り、役割を全うである。これこそ各自が守らば
この様に急速に発展をとげて来ている我部が一

その進歩をよし、成長を望むるのであろう。また、先輩が死してくれた偉大なるあいあいを忘つて置くことなく、誇りと勇氣を心に期して、部を育くなければならぬ。そして、これを我々書道部員に与えられた使命としなければならぬ。

現に我々は、クラブという団、又は集團の中にいる。この様な集團の中に入る時、そこは個人と集團（クラブ）という二重の生活が繰りかへられる。そこにおいて個人は集團の葛藤が何百回となく繰り返されて、二者択一に直面する。つまり、書道部優先か、個人優先かの重大な問題の岐路にたたされるのである。そこで私は考えるに、当然集團の行動に参加することだと思ふ、（これは時と場合により小々変わるかもしれない。）なぜなら「人間は環境によつて作られる」と言われる様に人間形成をなす事は言うまでもなく、人間（個人）の行動の仕方は、クラブの部員として所屬していることによつて、また個人が行動する動機はクラブに所屬していることによつて、ほとんどコントロールされるからである。

が大切であると確信する

次にクラブに於いて問題になるのは、役員である。役員とは、基本的にあるクラブにおいて、地位（一年、二年、三年、……）に給されたところの行動の型である。それは、またクラブに属する色々な権利と義務を當りかゝり、相互的で、互換的である。これら、バツマンとした時に、互換的に正しく信頼し得るのである。たかひこれに及する行動を取るならば、クラブ内のムカは秩序のない不安定なものとなる。以上のことがなされた時、我々は部員としての誇りをもてるだろう。幸いにも、部長に古田教授、講師に赤松、野村両先生というファイトのある諸先生方をむかへ、書道上だけでなく色々な相談相手としてもらっている点、おしても誇りが持てるのであらう。

最近、年々とさみかれていく書道振興を爲に、また、西日本書道発起の爲に、先輩が苦しいして作り上げてくれた西日本高等学校書道部、八公という大きなやがいのある仕事を世々を承つていく。この様な事を企てるには、やはり集團（クラブ）と個人の行動をわきまえて、団体生活の規律を守る事が

最も今までと異なり、世々承つていくものとなつていく

ラアに所属していることによつて、ほとんどコン
トロールされるから、ある。

が大切であると確信する

副幹事としての私の目標

商学部三年 齊 藤 九 生

昨迄までの行事に比べると今年は一二行事が
多くなった。一つは、現在二年生以上が練習して
いる、全国総合書芸展への出品、もう一つは、
十一月頃催される、西日本硬筆展への出品であ
る。この様な大会への出品は、我がペン習字部門
創設以来初のものだと思ふ。この様な大会にもつ
と以前から出品するようになっていたら、ペン部
員もさつ／＼意欲を出して練習に励んでいた
らうながらうかと思われる。何故なら、いかに
練習し、努力してもまた単なる展覧会等では何と
なく満足し、ほいほいがあるのではないだろうか。
やはり毛筆部門のように、県展々という大きな目
標があつてこそ、毎日の練習に意欲が出てくるの
だと思ふ。部員一人／＼がこの様な大会に目標を
置き、意欲を燃やせば、自然とペン部門の練習風

様な筆を全うする。やはりに、集団生活、
個人の行動をわきまえて、団体生活の規律を守る事

景も今までと異なり、何を講々のものとなつて、く
事を私は確信する。部員全員が何となく、
気軽に、自由に話し合せてこそ、部生活の本質の文に
なるのである。部員と、そのほかの部員は、
この部生活本来の姿に少しでも近づく事であらう
私のこの目標を達成する手段として右に話したこ
の大会を行軍の中へ入れたと云、その道言では
よい。こ、様に云えば、お前個への目的、端に考
慮を利用するのからと、極端に考える人が表、れ
るか見れないが、それはとんだ誤解である。こ
の弁明は私か態々下手な文章で述べる必要はない
と思ふ。私は文章を書くのがどうも若手でこれが
ら先、どう鏡けてよいのか分らなくなったのでこ
らで私の目標について述べる事はやめる。
最後に新入部員の人に二言、三言云つておきたい。
普通部室での時と練習の時とのけじめをけつさり
とつけてほしい。この事は部運営上(生活上)最
も大切な事と私は思う。次に現在新入部員の方は
熱心に練習に励んでおられるが、この気持を忘れ
ず線香花火で終わらないよう特にお願いしたい。も

と耳にし、受入書に署名し、昭和三十九年度の卒業生は恵ま
それからすると昭和三十九年度の卒業生は恵ま
出ていたといえるかもしれませぬ。結果は御存知

入部してみても

薬学部一年 前 田 勇 子

畳の香りも真新しい日本間道場での練習、故郷
を離れ下宿生活を始めた私にとって、畳の香りは
なつかしいものだった。クラブ紹介の時まで書道
部に入部する事をためらっていた私は、練習の月
日がたつにつれて、入部してよかつたのだと思う
様になった。学校から帰って何もする事がなくて
ぼんやりしているよりは時間を有効に使った方が
良いと思う。福火のカラーから言っても女子が少
ないのは仕方のない事ではあるが、書道部へ毛筆
にも女子はわずかに三人、書道の性格からいって
女子にも向いているのに、入部してみても女子があ
まりに少ないのには、驚いてしまった。書道部の
雰囲気はよい方、おもしろい人や、おしゃべりな
人や、おとなしい人などいて、退屈しないですむ
でも、新入生だけでも四十人位いるので名前と顔
がなかなか結びつかない。三ヶ月たった今も名前

のわからない人がいっぱい。これは私の責任な
ので名前を覚える事に努力しなければといつも思
う。

薬学部に入部する私は、三斗とぼろと授業が
忙しくてクラブ活動は無理にしれないが、出来
るかぎり続けていきたいし、今より多少しても上
達する事を願っている。

入部してみても

商学部一年 船 越 庄 也

入部してからの感じた事や思ふ事を書いて見よ
うと思つ。バラバラな文になるかもしれぬが、こ
入部する事を受付に行つた日に練習を初めてし
ていったけど、まず感じた事は、先輩の人達がい
やに陽気にやってくる事だ、幼少の時から習習と
いうものは心を落ち着けて書くと言はれていたこ
いか、その事が強く感じられた。それから、畳の
上に毛布を敷いて、机の上で書いてある事。僕に
は出来そうではないと思つた。それから墨汁をこぼ

である事ケニツ。その日に「碧湘暉照」という字を書いた。先輩の人達は九成宮だ、と言つた。

成宮がどの型で、どんな線質かは知らないの
で、両校の字、キストに載つてた様を気がした
が、手前のとおりになつた字を、何度か書いた。
僕のも合は、このように練習開始前に先輩の
人達と一緒に練習したノ、書道部というものに
動に早く答へこめた。この時井上君と一緒に
た。だが井上君もさつとそうだったと思う。練習
開始から約一ヶ月半が過ぎたが、初めの頃、筆の持
つで、よぶ、四つた。高校の授業では無理に言
われなかつた。で、どうしようかと思つていた。
でも福大の部に入つて筆は下の方を持たずに立て
て書く事。このことを、しつこく言われた。そう
しないと状割の時に困るのかで。これならも色の
な壁にぶつかるとかもしれないが、その壁を越すと
進歩があると思う。それから青藍社展や連盟展な
ど作品を山見て来たけど、これが良くて、どれ
が悪いのか、は全然解らな。だけど作品を見て
て（先輩の）、僕にもあんなのが書けるよにな

るのだろうかと言つて、スアになる。

学術文化週刊の発表作品を書くのに、滑棘千代

しという字は、しか、この間からい書いたと思つ

その間に強化練習が入つて、で、り、並、後、数書い

たと思つてゐる。そのほかの二枚より、自分、出来

たと思つてゐる。この強化練習の時に、思ふが、は、

たら楽しい練習だったと思つてゐる。日本、陽、

強いのが夏の合宿の時か、忘、れる。で、

たら流し、ながら、シ、ツ、一枚、書くのかと思つと

少、グ、ツ、ツ、た。この合宿で、やめ、人、出、る、

知、れ、ない。先輩、人、は、毎、年、や、め、て、い、く、人、が、多、い

ので、その人、数、を、減、ら、せ、う、と、努、力、し、て、ゐ、る、と、か、

僕達、一、年、生、は、資、質、の、あ、る、の、が、多、い、と、か、で、

期、待、さ、れ、て、い、る、ら、しい。この期、待、に、せ、い、たい。そ

れ、から、赤、木、石、野、先生、の、筆、を、ま、さ、す、が、

入、つ、て、こ、ら、れ、た、の、を、見、て、

「ど、この、オ、ソ、さん、だ、

ら、つ、し、と、思、つ、て、位、の、カ、ツ、コ、ウ、を、し、て、あ、

た、の、で、先、生、と、解、ら、な、か、つ、た。書、道、の、先、生、だ、

から、さ、ち、り、と、し、て、知、

る、と、割、に、話、し、や、す、そ、う、を、ほ、つ、と、し、た、感、が、あ、

先輩の人達も先王のよ、な、く、多、い、の、心、

ど作品を山見て来たけど、これが良くて、どれが悪いのへ、は全然解らない。だけど作品を見て（先輩の）、僕にもあんまりのが書けるようになる

先輩の人達も先生のよっぽど人が多いので、上と下との交りが出来やすいと思う。鬼に真、四年間続けたと思う、四年間もすれば少しは上手になるだろう。

入部一ヵ月

乗学部一年 副 田 又どり

友人を引き連れて、恐る恐る部室の扉をたいたのは、ほんの一ヶ月前のことである。その前にも何回か、部室の前を、行ったり、未だりしてはみたのだが、そこが、冷く閉ざ、おんは入りに、なかなかな、勇気がおなかつた。「書くことは好き。そして書くからには、人並みの字を運らねたい。そんな単純な気持ちで入部を希望したのだが、初めて23番教室へ行った時に、昏が一生懸命、静かに書いているのを見て、当然、ずいぶん、私にとって、意外な雰囲気だった。

「暇さへあらず、女のふし字を書いている」という兄の言の如く、書こうという気になるものは

と解らなかつた。書道の先生だからか、と、束ねられると思つていた。そしてこの方が先生だと知ると別に話しやすそうではあったとした感じがする。

女性の方が多いと悪いの外、硬質部員のはとんとか、男性で占められていた。しかも、習字の字と取り組んでいる。

気楽に、そして自分なりの行かなく、ことを楽しみたかつた私だった。部室、う団体からに飛び込んで以上、行動を共に過ごせられない。悪性に書きたくはない。性にかいた時並、まだ一ヶ月しか経たない自分であつた。そして何回か連絡してしまつた。心かよ落ち着いて、豊かな気持ちで扱はずして、字が上手に書けようとする。字は、字は人の心を表わすにまさる。見れば必ず字が速なっている時の手本は、視察から、くやられぬ。ホシごみに横ゆれする頭は、時折、おんごにもなりかねない。家へ帰つて、字が好きは父に、練習態度を報告するのだが、こんな状態の時、精神がたるんだら、と刀ツを入られる。如何なる時にも、真剣に取り組めるという精神力が、養われようである。それも、どんな状態の時でも自己に甘えず、練習を真面目にやれとの話しだが……。部員の人達にも、余り慣れてない為か、練

一年限りである。一旦たてば後輩に譲らねばならない一年間だけの存在であり勝負でもない。この一年間は緊張の連続だ、一遍阿光のこと、一ヶ月光のことは、三ヶ月光のことは、そして半年先のことはと将来を予測し、現在を導かねばならぬ。当り前のことだがこれがまたむづかしい。しかしながら君達は大変幸福な面もある。今年で四年目になる赤木石掃先生の健在であり、また我々の先輩でもある野村清風先生の存在、そして近くには原先輩、野田先輩を初め安河内先輩、西先輩、加見先輩がおられる。赤木先生は私々書道部をほんとうに理解して頂き、我々一人一人に力を入れて下さる。書道部がこれだけ充実したのも赤木先生の存在に起因する。なぜならば、ただ技術の向上のみならず、サークル活動の意義、いわんや我々人生の生き方までも教えを授けさし、その上先生は、承知のようにライターであり明るく開放的で、グックパランである。我々も心おきなく話しすることが出来る。また我々の先輩もそうではなかったかと思われる。心算もこの気持ちで

ぶつかってこれ。

しかし明るい民主的な中にも礼儀を持つてほしい。自由な中にも礼儀は大切だ。これを我々書道部の一つの雰囲気でもある。また君達は先輩を軽視しては部を壊せば望めない。今や福大書道部は縦のつながりに於いても横のつながりに於いても寒々しくしている。三年前に発足した書心会（福大書道部の前身）も、この一年、この間にそろそろ実質的な活動にのり出すだろう。書心会とあわせ福岡大学書道部中と行って行こうとしている。その中に先輩に対する考え方も大切な問題となってくる。先輩を相手にサルもよろしい、ホワイトピックも大いによからう。しかしそれだけでは誠に残念だ。諸君は書道部を色んな面から発展させる義務がある。その為にも、入りに相談しなければならぬ。それによって、おれに對するニツク、ネームも不思議なよからう。しかしながら先輩にも色々性格の持主がある。なか／＼のりにくい銚子のような先輩もあれば、コノプのように口の広い先輩もいる。酒を八れるのに銚子はコノ

そうてなかつたかと思われれる。君達もこの気持ちで

く、大変むづかしい反面、コツブはいたって簡単である。しかし、入ればどちらでも同じである。一方相談する君たちはどうか。野球のボールを投げても、体でぶつかるとして簡球するもの、ただ手先だけの技術で捕球するものは、練習は明らかであろう。体ごとぶへけるつもりで苦しむ受けとめて欲しいものだ。君達は全く幸福である。古田部長、赤木先生、野村先生、それに先輩、また四年生も多数居るではないか、もっともつと相談したまえ。

そしてすばらしい受け方をしてくれ。

あえてこのような事を書いたのは、或る先輩が部員の態度が悪い、そして先輩を軽視する考えがある。これではだめだと言われたからである。もちろん我々四年生自身未熟であり、努力しなければならぬ。君達は君達で消化し努力をおこたってはならない。そして百余名のすばらしい書道部として発展してくれるものと信ずる。

(昭和四〇年五月二〇日 記)

の広い先輩もいる、酒を八れるのに鑑子はコバ

新入生観迎コンパについて

法字部二年 佐久阿 采

この度 私達は、新入生観迎コンパの役員として盛大に行うために、精一ぱいの努力を致したつもりです。しかし、いざコンパを開いてみると、新入生諸君の中には何か物足らなかつたかもしれません。そこは余後、諸君に期待します。まず新入生コンパは、一つに、現部員と新入生諸君との親睦を昇る爲に、催されるものであります。そのためには、部員はもとより新入生諸君の全員が参加されることを望みます。そこには自己主義は許されぬ。いかなる理由があろうとも、……。その反面大学生活、いや書道部の中に於ても数多くの苦しみや楽しみがあることを忘れぬいで欲しい。新入生現在が入り混り、一つのスタラムとなつて初めて、書道部の発展へ導くことが出来ることと確信しています。尚、古田部長、赤木先生、野村先生、三浦、野田、原、安河内大先輩など御

出席いただきましてうれしく思つて居ります。そして、先輩のおかげによりいい会場が見つかりましたことを感謝しております。

連盟展について

法字部 二年 広 漫 俊 明

「連盟展について書」と言われても、何を書いてよいやら。わからぬまゝにペンを取りました。

連盟展だけあって、各大学立派な作品が出ていました。各大学とも同じような作品が多く見受けられた。福大の場合は、赤木先生の方があって、かなりバラエティーにとんだ作品が出来たようだ。それに作品を仮表装でなく、額にしたことによつて、一歩とよかつたと思う。昨年は仮表装であつたので、あまりパットしなかつた。しかし、オーに感じたことは、作品を創ると、うごこばかりにこだわらず、最つと楷書を入れてもよかつたと思う。文化週向のように、古典の臨書をもちつと楷書連展に増せば、如何かと思ひます。

やはり何と言つても、僕が常に感じる事は古典の臨書を徹底的にやる必要があると思ふのだが。それは古典の臨書は全ての道に、通しろと思ふからである。それに、墨色をもつて考える必要がある。それは、より作品効果を上げるために必要反事柄であるからだ。作品についてはこの位にして

会場であるが、中心部—内容—宣伝が良かった。ためか、いつもより多くの観覧者があつたようだ。会場の料金は無料だし、場所も広く立派だから、これから先もここで行うべきだ。入場者に学生の色があまり見られなかつたのは淋しい感じがする。これから先、このような催しには積極的に行つてもらいたいものだ。何かの役に立たないとも限らない。



進展に増せば、如何かと思ひます。

福岡学生ペン習字研究会

三年 誌 巻 輔

我等、福岡学生ペン習字研究会は、大学、短期大学のペンを趣味とする同胞が互いに手を取り合つて、あらゆる困難な問題を眞剣に討議し、会員相互の親睦融和を計り、書技の向上に精進できることを目的として、昨年十月に結成されました。結成以来九ヶ月余り、当初福大ペン習字部員を含め三十三名、その内他大学が五名程凌ぎましたが、今では新聞に投書した反響もあつて、会員七十名以上、その内他大学は三十名を越す躍進ぶりを見せ、北九州から、高校生からと入会希望があり、これとえに結成するに際し、幾多の困難な問題を乗り越えてこられた諸先輩方々、又役員として会員のみならずの熱意ある御協力の賜であり、ここに深く感謝する次第です。さて、FRKも私達で二代目を迎えるわけですが、まだスタートしたばかりで、これから先、幾多の

困難な問題を控えているわけで、もくもく何をやるにしろ、それなりの苦労、苦痛はあるものです。我々二代目役員はそうした問題を忘くし、より成熟した実を結ぶ為努力しなければならぬと責任を感じる次第です。又これからはペンの向上けもろろんのこと、研究会に対する関心を深めると共に、研究会内部の充実を計らなければなりません。それには会員一人一人の自覚と積極的協力が必要になってくるわけです。それがなければ本会は、停滞し、ついには廃化してしまふ。恐ろしい発展は一致団結本会員一人一人にかかっているのです。そして、あらゆる問題を自らの力で解決し、後世まで我々後輩のよき道標として生きねばならないのです。

それから行事予定としては、毎月一度、才二週の日曜日を練習日とし、又十月に本会最初の試みである研究会展を開くよつに予定し、その他、レクリエーション(ソフトボール大会、卓球大会)、ピクニック等、又、新聞「たし」と発行する係計画しております。練習日や、いろいろの行事には積



極的に参加して、その意義を理解し、そして研究会を認識していただきたいと思います。

最後に、会員のみならずの上層のご協力を切望すると共に、役員諸氏に今一層の努力、活躍を切望して止まない。

全国総合書芸展によせて

経育学部二年 三 氏 志 作

この書芸展が下関で開催されると云うことを聞いたのは、確か四月の末日頃だったと思う。

二年以上は強制出品という厳しい斎藤さんのお言葉の下で、一ヶ月余りの練習の結果、十人余りの者が出品した。

僕に聞しては、初めどの様な作品を選択しようかと迷ったが、五月十日頃には、て要約ペン knife というペン部門が使用している月刊誌の一月号より、或作品を選んだ。この作品の特徴をつかむのに、大分時間が掛った。特徴と云うのは、僕が今迄練習をしてきた字とは、まるで書体が異なっ

ていて、縦線、横線の強弱がはなはだしかったことなので。

然しながら、何とか練習を重ねて居る内に、『ペン』を使つて、上手にいくようになりましたが書体の方は、出品した作品すら見苦しいものとなりました。

練習方法としては、一字一字を手本とよく見せれば、思ひ切つて書く様に心掛けました。

しかし、配字の点に聞しては、全く無知同様であったので、何とか作品全体を美しく見せる様に工夫しました。御陰で、まあまあ作品となりました。

作品の大きさは、どの程度のものにしていいか分からなかったが、結局は、西洋紙の大きさに致しました。

最後に残つた難題は、字の大きさだった。何分、ペン字なので、余り大きくは書けなかったのですが、何とかうまい具合に書くことが出来ました。字数は、三十字と出品作品の内では、少ない方でした。

今迄練習をしてきた字とは、まるで書体が異なつた。

出品期日は五月末日と云う事でしたが、野村先生の御都合で、六月十一日迄でよいと、言われまし

の賜物だと信じます。真に有難うございました。

たので、お言葉に甘えて、十一日提出しました。然し、不安でいっぱいでした。

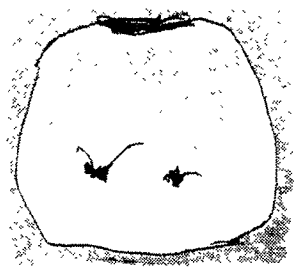
数日後に、成績発表がありました。書道部の成績は、特別賞四人（内一人は毛筆部門）を筆頭に、全員入賞という輝やかな結果だった。

六月二十七日に、下関での展示会を、斎藤さん、山田さん、佐久間君、久保さんと僕との五人で見に行つた。

硬筆の作品は、毛筆の作品と比べると、出品数は少つたが、内容としては取分け位に、素晴らしいもので一杯だった。

今大会は、第一回目で、次回は、もっともつと、素晴らしい作品が集は、間違いないことの様に見えるので、今回の作品よりも、なおさら立派なものを作って見たいなあと、表彰式が終了

した後、街中を五人で歩いている時に思った。敢後二りますが、今大会はこの様な立派な結果に努めることが出来たのも、野村先生の御力添え



(19)

雑談

(一)

法学部二年 近藤敏則

学生であるという事は、色々な場合において本当に良いものだと思う。身近なことについて言えば、交通機関、映画館などには学割がきくし、バイトをする時は少し働けば、すぐ手元に現金が入る。しかし、学生は本当に良いものだと思うと同時にそれはすぐに忘れられるのである。おかげさと言え、学校のマスプロ化に影響され、また今まで入学試験で苦労して来て、大学に入ると同時に今までに積み重なった不満がせきを切つたように流れ出し、学生本来の眞理の探究を忘れ逃び興じる様になるのである。自分も偉そうは事を言える柄ではないが、この「雑談」において反省してみたいのである。

学生生活四年間が、卒業した人々は、皆早すぎたと言う。四年間に学生は一体何をし、何を残し

て去って行くのであろうか。ある人は、すばらしい恋を夢見、ある人は、未来の生活設計の爲に、また、ある人は免許証を取るのに必至である。学生本来の姿とは、一体何であらうか。前に述べた眞理の探究であらうか。それだけであらうか。これを詭まれる皆さんに私は、敢えて質問をしたのである。

話しはかわるが青春は若さである。こんな言葉をもう一度かえりみてみたい。女学生がスターの座に憧れを相き、キヤーキヤー騒ぐのをテレビ等で見ると背すじがぞくぞくする。気味が悪いからである。あれが青春というものであろうか。あれは確かに若さをぶちまけている。が、青春という言葉では呼べないと思う。あの騒ぎはやり場の無い若いエネルギの発散にすぎないと思う。一方ではベトナム戦争が繰り広げられている間にも、当のアメリカのハイティン達は遊んで遊んでいるではないか。小国日本の安全たる立場に於いてどうすればよいか等、僕にはわからない事だらけであるが、そうも言っていられない。少しでも勉強し

運動し、身体に気をつけて、自分の進む道をしっ
かり見つめていきたい。

明確な答を出してはいないが、これからもう雑
談(二)し、雑談(三)しという具合に「荒唐」に続け
て出してもらいたい。



編集後記

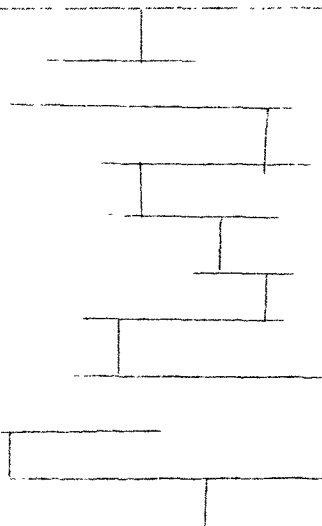
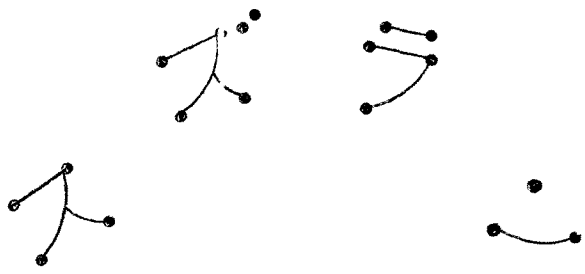
編集長 江真征夫

一身上の事情のため、約一、月間休部したために
六月下旬に発行の手配のものが、大分遅れました。
この発刊を頭行されるながら、待つておられた部員の
皆様に御迷惑をかけたこと謹んでお詫びいたします
また、内容の点に於いても計画した通りに行かず
いつもの激関系とあまり交わらないものとなってしま
いました。これもたえてお詫びいたします。
発刊に際し、御協力くださった先生、諸先輩、亦
貴の方に心から感謝いたします。月号を十一月に発
刊する様になっています。これは、よりりつぱな
のにしたいと思ひますので、これから先も御協力を
お願いいたします。

編集者

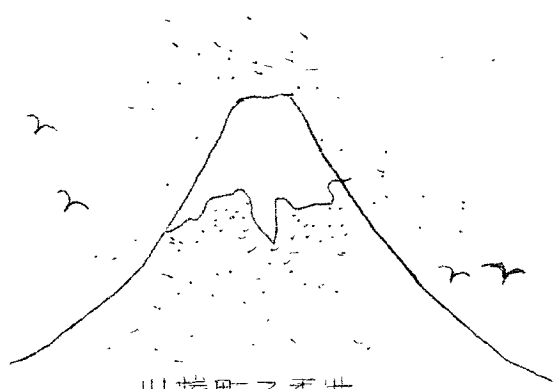
編集長 江真征夫

江真征夫、宮泉、
佐久間 潔



喫茶・軽食

福大八ス停前



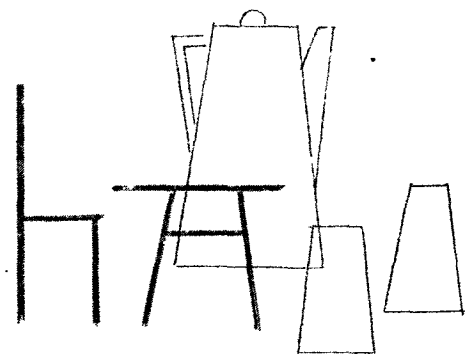
川崎町三番地

TEL (23) 0527
(23) 1557

雲峯堂

書道用具
日本画材料

やすくて
美味しい



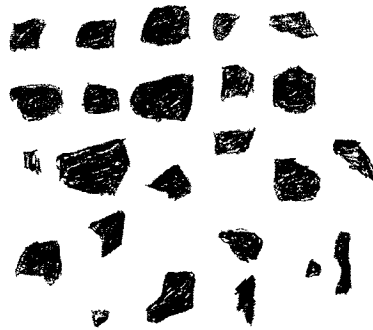
工学部食堂

福岡大学正門前

喫茶 軽食

中村

福岡市田島

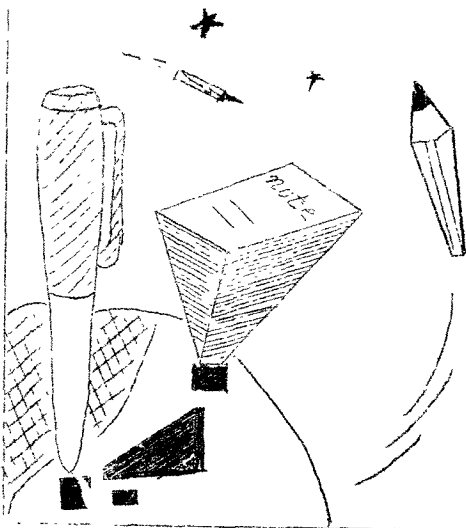


立石商店

文具店

本店 六本松3丁目
TEL (74) 5440

支店 六本松九大分校正門前
TEL (75) 5223



荒鷲 第三号

福岡大学書道部校閲誌

昭和四〇年九月一日発行

編集発行 福岡大学書道部

編集委員 江 漢 証 夫

左久間 潔

空 京 邦 生

印刷所

佐賀県唐津市吳服町

松 尾 印 刷